

## 佛蘭西人口の將來とその對策（二）

塚 原 仁

佛蘭西人口が過去に於て如何なる發展を遂げたか、又そこに看取された出生・死亡の傾向が如何なるものであつたか。之に就て私はいくつかの論文に於て述べた所であるが、今之を要約するならば、佛蘭西の出生率（妊孕率）が減退を續けて來たこと、死亡率も減退したが、西歐文化諸國に比して尙高位に在る爲に、その自然増加は極めて少く、年によつては自然減少（死亡超過）を示現することがあり、人口減退の様相が如實に見らるゝと云ふことである。而も佛蘭西人口が荷つてゐる此人口減退（それは又民族滅亡への道に通づるものであるが）なる暗い影は依然として持續してゐる。が若し此儘佛蘭西人口が推移するものとすれば、佛蘭西はどうなるか、此點に關聯してその將來人口やその年令構成等に就て正しき科學的推測を行ふことが出來たならば、吾人は一層佛蘭西の人口問題の深刻性を認識し得るであらうし、又之によつて佛蘭西が此事態に對して何を爲すべきかの問題も亦自ら生れることとなるであらう。

茲に將來人口予測の必要が生起する。云ふ迄もなく將來人口の予測には種々の方法がある。過去に於ける人口増加の趨勢によつて如何なる傾向線を適用すべきかを決め、之に基いてその線を將來に引延してゆく方法はその一例である。之にも一定數を以て増減する直線式を當て嵌める場合もあれば、又一定の率を以て増減するとする複利線式を適用する場合もある。過去の人口の動向に關する統計資料に基いて、如何なる傾向線を當て嵌むべきかと決定すれば、將來人口は單なる計算によつて決定することが出来る。だが總人口の動き又は自然増加によつてかゝる予測を行ふことは、方法としては簡單だが、實際問題として人口の増減は人口の年令並に体性構成、更に出生、死亡、移出入の差等の諸要因の

動向如何に依存するものである。從て此等資料が充分でない場合は別だが、今日では普通此等諸要因に就ての資料が整備されてゐるので、之に基き種々の假定を設けて將來人口の予測を行つてゐる。かつて我國に於て上田貞次郎博士や中川友長博士や戰後經濟安定本部等に於て行はれた人口予測は何れも此方法に依つてゐる。之は唯我國だけの例ではなく、外國も亦然りである。勿論實際に於ては如何なる假定を置くかによつて、その方法も少しづつ異なるが、具體的に一般的方法を示せば次の通りである。即ち一定年に於ける人口の男女別の各年令階級に生命表に基く夫々の死亡率を適用し、之によつて次年度一月に於ける生殘人口を得、更に此生殘人口に夫々の死亡率を適用してその次の年の人口を得ると云ふ様に、之を毎年毎年繰り返すのである。更に生れて來る人口に就ては將來の出生數の予測を必要とするが、之が爲には、生殖年令に在る女性數に年令別の妊孕率を適用し、之を又次年度以後に繰り返すのである。尤も實際の計算に當つては死亡率にも妊孕率にも種々の假定を置き、例へば死亡率も妊孕率も不變であるとか或は、一定の割合で減ずるものとするとか、或は一定年間は漸減するが、その後は不變とする等の假定を設ける。勿論如何なる假定を設くべきかに就ては、此等諸事象の今日迄の發展傾向なり、其他の事情を考慮して決せらるゝこととなる。併しなから何と云つても種々の要因を前提とするものであり、特に移出入や出生率に就ては正確なる動向を予測することは困難であるし、死亡率も亦必ずしも確定的なるものとは云ひ難い。從て計算の結果は云ふ迄もなく諸假定が實現せられたる場合に於ける將來人口であることを忘れてはならない。

## 二

ソヴィエトは一九三六年佛蘭西人口につき人口予測を行つたが、その際は彼は二つの假定に基いて二つの計算を行つた。其一は妊孕率も死亡率も各年令とも一九三五年の水準に在つて不變であるとする。即ち出生死亡に影響すべき家庭道徳も衛生狀態も變らないものとする。

其二は妊孕率も死亡率も最近年に於ける割合で各年令とも減少するものとする。即ち妊孕率に就ては一九三〇—三五年の割合で、即ち同期間に出生數は七四八、〇〇〇人より六三八、〇〇〇人に減退した。死亡率に就ては一九二五—三三

年の割合で、即ち同期間に七〇七、〇〇〇人より六五八、〇〇〇人に減退した。（一九三〇—三五年の期間を取らなかつたのは、一九三〇年の死亡数が特に少く、従てその年より一九三五年の死亡率が高かつたからである。）

何れの假定を取るにもせよ、此場合移出入民数は全くなかつたものと假定してある。佛蘭西に於ける外國人數は第一次大戰後急激に増加したが、其後著しく減少してゐる。従て此移民に就てそれ以外適切なる假定を設けることは不可能である。尙又佛蘭西に移民を供給してゐた歐羅巴諸國の人口増加は益々緩慢となり、その源泉が急速に枯渴するに至るべきことも亦考慮に入るべきであるからである。

第一の假定に基く、即ち妊孕率も死亡率も變らない場合に於ける予測人口は次表の如くである。

	出生		死亡		死亡超過		人口	
	年令階級	一九三五年	年令階級	一九四五年	年令階級	一九六五年	年令階級	一九八五年
一九三五年	〇—四才	三六〇,〇〇〇人	一九四五年	二六〇,〇〇〇人	一九六五年	二五五,〇〇〇人	一九八五年	二,三三,〇〇〇人
	五—一四才	六六九,〇〇〇		五八三,〇〇〇		五,二四八,〇〇〇		四,四六八,〇〇〇
	一五—一九才	一,九三,〇〇〇		三三三,〇〇〇		二,五三三,〇〇〇		二,六四四,〇〇〇
	二〇—二九才	六六八,〇〇〇		五三三,〇〇〇		四,九七八,〇〇〇		四八二四,〇〇〇
	三〇—三九才	六五三,〇〇〇		六三四,〇〇〇		五,九四〇,〇〇〇		四七九九,〇〇〇
一九四五年	四〇—四九才	五七六,〇〇〇		六〇五,〇〇〇		四,七二〇,〇〇〇		四,九一〇,〇〇〇
一九五五年		五三,〇〇〇	一九六五年	六四,〇〇〇		一三,〇〇〇		四,四六,〇〇〇人
		五三,〇〇〇		六四,〇〇〇		一三,〇〇〇		四,五三,〇〇〇
		五三,〇〇〇		七〇,〇〇〇		一六,〇〇〇		五,五三,〇〇〇
		五三,〇〇〇		七〇,〇〇〇		一六,〇〇〇		五,六二六,〇〇〇
		五三,〇〇〇		七〇,〇〇〇		一六,〇〇〇		五,七三七,〇〇〇
一九六五年		四八,〇〇〇		七〇,〇〇〇		二二,〇〇〇		五,八三三,〇〇〇
		四八,〇〇〇		七〇,〇〇〇		二二,〇〇〇		五,九〇〇,〇〇〇
		四八,〇〇〇		七〇,〇〇〇		二二,〇〇〇		六,〇〇〇,〇〇〇
		四八,〇〇〇		七〇,〇〇〇		二二,〇〇〇		六,一〇〇,〇〇〇
		四八,〇〇〇		七〇,〇〇〇		二二,〇〇〇		六,二〇〇,〇〇〇

之に伴つて、年令構成も亦次の如く變化することになる。

五〇一五九才	四、七五、〇〇〇	五、二七、〇〇〇	四、八一、〇〇〇
六〇一六九才	三、六五、〇〇〇	三、七六、〇〇〇	三、五四、〇〇〇
七〇一七九才	一、九七、〇〇〇	二、九七、〇〇〇	二、三四、〇〇〇
八〇才以上	五〇〇、〇〇〇	五七、〇〇〇	六三、〇〇〇
			七八、〇〇〇

從て若し妊孕率と死亡率とが一九三五年の水準にとゞまつた場合、その結果、

(一) 出生に對する死亡超過は一九四五年一二、〇〇〇人、一九六五年一七八、〇〇〇人、一九八五年二〇七、〇〇〇人となる。

(二) 人口は一九八五年迄の五十年間に約七百二十萬人の減少を見る。

(三) 一五才未満の幼年階級の人口は漸次減少して、五十年後には約三百五十萬人即ち三四%を失ふ。

(四) 六〇才以上の老年階級の人口は三十年前後には約百萬人即ち一六%を増加する。

即ち一九三五年に於て佛蘭西に於ける死亡の出生超過は極く僅かではあるが、佛蘭西の人口狀態が重大局面に直面することは右の表よりの結論に於て明かなことである。

以上は佛蘭西の出生や死亡が一九三五年の水準を將來も持續するとの假定に基いた計算であるが、次に第二の假定の場合、換言すれば佛蘭西の妊孕率も死亡率も共に減少するものとせる場合は如何。實際死亡は甚だ高い年令階級を除いては總ての年令階級を通して醫事、衛生の進歩によつて、常に減退を持續してゐるし、又特に強力なる出生奨励案が採られない限り、出生減退の持續も亦確かである點を考へる時、此第二假定がより眞實に近いものとして一層興味がある。即ちソーヴィーの計算せる結果を示せば次の通りである。

年 次	出 生	死 亡	死亡超過	人口數
一九三五年	六八、〇〇〇人	六八、〇〇〇人	三〇、〇〇〇人	四、四三、〇〇〇人
一九四〇年	五三、〇〇〇	六二、〇〇〇	八、〇〇〇	四、二四、〇〇〇
一九四五年	四七、〇〇〇	六〇、〇〇〇	一三、〇〇〇	四、〇七、〇〇〇
一九五〇年	四三、〇〇〇	五五、〇〇〇	一二、〇〇〇	四、〇〇、〇〇〇

次に年令構成の變化を見れば次の通りである。

年 令	一九三五年	一九四五年	一九六五年	一九八五年
〇—四才	三、三〇、〇〇〇人	三、四〇、〇〇〇人	一、五四、〇〇〇人	七〇三、〇〇〇人
五—一四才	六、九七、〇〇〇	五、八七、〇〇〇	三、八四、〇〇〇	一、七四、〇〇〇
一五—一九才	一、九八二、〇〇〇	三、四〇、〇〇〇	二、一五、〇〇〇	一、三三〇、〇〇〇
二〇—二九才	六、五八、〇〇〇	五、三六、〇〇〇	四、八四、〇〇〇	三、七九、〇〇〇
三〇—三九才	六、五三、〇〇〇	六、三九、〇〇〇	六、一六、〇〇〇	四、〇三、〇〇〇
四〇—四九才	五、三三、〇〇〇	六、一八、〇〇〇	四、九七、〇〇〇	四、七三、〇〇〇
五〇—五九才	四、七六、〇〇〇	四、七三、〇〇〇	五、四六、〇〇〇	五、五三、〇〇〇
六〇—六九才	三、六五、〇〇〇	三、八三、〇〇〇	四、六三、〇〇〇	三、六四、〇〇〇
七〇—七九才	一、九七、〇〇〇	二、一六、〇〇〇	二、四五、〇〇〇	三、二五、〇〇〇
八〇—八九才	五〇〇、〇〇〇	六八、〇〇〇	九九、〇〇〇	一、三〇、〇〇〇

以上の表によつて吾々は、次の事實を指摘することが出来る。

(一) 死亡の出生超過は一九四五年には一二六、〇〇〇人、一九六五年には二九二、〇〇〇人、一九八五年四二九、〇〇〇人となる。

(二) 五〇年間に人口は千二百萬人を失ふ。

(三) 一五才未満の幼少年數は、同一期間に七百六十萬餘人即ち七四%以上を失ふ。

(四) 六〇才以上の老年階級は三〇年間に二百萬人約三二%を増加する。

以上によつて描かれたる佛蘭西人口の將來圖は決して好ましくないが、擬而西歐諸國例へば英吉利、獨逸、瑞典等に就て行はれた同種の予測と比較する時、此等の諸國も亦極めて悲觀的結論を下すべき事態を現出してゐる。從て佛蘭西人口に見らるゝ人口並に構成に於ける變化は云はゞ、西歐諸國に見らるゝ普遍的現象と云ふことが出來、その限りに於ては、佛蘭西のみが大騒ぎをやるべき問題でもなさそうである。併し私が幾度かの機會に指摘した様に、佛蘭西は最も早く出生減退が始まつた國であり、又從て年令構成に於ても不利なる點に於て、他國よりも一層人口減退の危機に暴露されてゐると云ふ事實を決して忘れてはならない。

佛蘭西の將來人口の予測に於て上述の如き悲觀的映像が寫し出さるゝことは、今日迄の佛蘭西人動態が當然に示唆せる所であつて、實は計算を俟つて驚くには當らぬことである。併し問題は佛蘭西人口の現状の正しき認識と分析とに基いて描かれたるその將來圖が如何なるものであるかと云ふことが正しく把握される時、此將來圖を以て宿命的なものとして忍受すべき謂れはない。航海圖に於て船の前途に暗礁があることが判つた時、船がその方向に向つてゐるからとて、何にも暗礁に乗せ上げることはない。否前途に暗礁があることが判つてゐればこそ安全な航海が出来るのであつて、吾々は之に對して航路をどう變更すべきか、正しき進路を見出すことが出来るのである。佛蘭西人口の悲觀すべき將來圖が判つてゐることは、佛蘭西人をして如何に此問題に對處すべきかの努力を傾注する方向を決定づけることとなる。

### 三

我國の現状を眺める時、過剩人口の問題が我國の前途に暗く立ちふさがつてゐる。人口減退從て過剩人口を患ふとする佛蘭西とは、正に一八〇度の對立を示すものと云へる。如何に人口を減らすか、少くとも人口を増さぬ様には如何にするか、それが問題である。從て我國の様に過剩人口に患んでゐる國から見れば、佛蘭西の人口問題は或意味に於ては

美ましい贅澤病の様にすら考へるものが多いことと思ふ。子供を澤山かゝえて苦しんでゐる貧乏人と、暮しの心配はないが財産を譲づる子供もなくあぢきなく暮す老人との對比に、日佛人口問題の相違を見ることは、全くの見當違ひではない。人口問題は之を個人的幸福の立場から採り上げることとも出来れば、又社會的國家的立場から之を採り上げることとも出来る。個人的立場と云つても個人は社會との有機的關聯に於て生活してゐるのであるから、個人の問題も社會の問題となるし、又逆に社會的國家的立場も個人を離れては存し得ないのだから、兩者は對立的なものであつてはならない。否吾々はその外に調和統一の立場のあることを忘れてはならぬ。各國の人口問題は夫々の特異性を示現するものであるから、その問題の意味を把握する上に於て、臨床學的には或特定の立場がより大なるウエイトを持つことは當然であるが當にその背後にあるものを見落してはならない。過剰人口に患む國から云へば、如何に過剰人口を解決するかと問題である。若し經濟的人口扶養力が一定とすれば人口が少いことは人類の福祉の増大を意味するから、その人口を減らすことによつて、その解決が可能である（註一）。確かに人口を減らしてゆけば、それで過剰人口問題は解決される譯であるが、それも或限界があることであつて、そこに困難なる問題がひそんでゐる。人口の少いことが人口問題の最後の解決ならば、佛蘭西には人口問題はない。英國の人口問題もなくなる。米國に於てすらトムスンは人口増加が緩慢となり、停止することの經濟的不利益を論じてゐるが、それは一つのナンセンスに外ならないことになるであらう。人口過剰は人類に取つて災禍の一だが、人口の過少も亦人類の患みである。私は過剰人口問題を故意に過少評價せんとするものではない。只過剰人口問題の外に、佛蘭西の如く、又英吉利の如く現に過少人口の苦惱に患み、之が原因の究明に努め、その解決に努力する國の問題が、假令その性質方向は異つても同様の重大問題であることを指摘するのみである。此意味に於て人口減退が經濟、社會、政治の面に於て如何なる害惡を齎らすものであるか、此點に就て若干の考察を加へることは、佛蘭西が何故に眞剣に我々より見て一應美ましかるべき状態に對して對策を講ぜねばならなかつたかと云ふ點に就ての認識と同情とを深める所以である。

(註一) 十八世紀末葉佛蘭西の革命家達は佛蘭西の人口は過剰で、社會的幸福を得る爲には、その人口を相當減少せしめねばならないと述べてゐる。「ボードウ(Baudou)及ジャン・サンアンドレ(Jean Saint-André)、カリエ(Carrier)、アントネル(Antonelle)及ギュフロア(Guiflo)等は減少すべき人命を數百萬と見積り、コロ・デルボア(Collet d'Herbois)によれば、政治的發汗は佛蘭西人千二百一十五萬人を殺さねば充分とは云へないだらう。」とティン(Taine)は云つてゐる。之だと云ふと佛蘭西人口を六―八百萬にすることだが、之に對して驚く人はなかつた。ギュフロアはその雜誌に「ギロチンが全共和國にいつまでも續いたとしても、佛蘭西はまだ五百萬の人口はあるであらう。」と書いた。之は決して單なる殺人的約瑟ではなく、コロ・デルボアの言に照らして考へると、人口と幸福とに關する經濟的概念を証明するものである。之に依つて見るも明かな如く、佛蘭西に於ても人口の減少に人類の幸福を見出さんとする人々のあつたことは明かであらう。

(Paul Leroy-Beaulieu La Question de la Population. p33-34)

## 經濟的影響

人口増加は移出入を別とすれば出生増加に基き、出生増加は必然に幼少年階級の増大となり、幼少年階級の増加は一定年後には要就業人口となるから、從て勞働力の供給増加となり、爲に賃金は壓迫され、一般人口の生活は不利となるとは從來主張せられた所である。かゝる立場よりは出生減退は大いに歡迎さるゝ譯であるが、出生減退の經濟的惡影響に就ても亦注意する要がある。

出生減退は一四才迄は全く消費者に過ぎない幼少年人口の減退を意味するが、之は生産者(廣義の勞働者)の就業度に不利なる結果を生ぜしめる。之に反し子供數が増加すれば當然之と逆の効果が現はれる。幼少年の爲の需要が大となれば、之に伴つて之に對應する産業の就業度が増大する。即ちその關係を公式的に云へば、家庭に於て子供がない場合には、二人の生産者即ち夫と妻とは――何故ならば子供のない妻は競争者として通常勞働市場に現はれ、男性勞働力を壓迫するから――只二人の消費者に對立する。之に反し夫妻と三人の子供より成る家庭では一人の生産者(母は家庭の仕事の爲に家に留らざるを得ないので勞働市場には出ない)に四人の消費者が對立することとなり、就業度は著しく上



昇せざるを得ない。之はそれ自体確に正しいが、それは問題を餘りに單純化してゐると云はねばならぬ。何故ならば今日の經濟社會に於て消費が發生するのは、貨幣的所得の裏付けがある場合に限らるゝので、即ち潜在的な需要は必要な財貨の購買によつてのみ満足されるのである。五人家族の消費額の如何は家父の所得額の如何に依る。そこで子供の多い家庭が子供の少ない家庭と同一の所得しかない場合には、消費は金額的には——勿論子供の少ない家庭は多子家庭よりも一層貯蓄の可能性が大であるが、之は別として——同一である。即ち消費の種類や方向が異なるだけであるが、實は之が國民經濟的に重大な意味を持つてゐる。

多子家庭の消費は衣食住と云ふ様な日常的必要物に主として向けられ、之に對して子供の少ない家庭では多子家庭に比し、生活必需品でないもの（美服、娛樂、アルコール飲料、煙草）、に一層大なる消費を充てゝゐる。食料や普通の衣料品の消費によつて農業、牧畜業、紡績業等の産業が促進され、之に對し大衆的贅澤により高級紡績業、麥酒釀造業、火酒製造業、映畫館、煙草工業等が盛となる。幼少年階級の爲の需要が減すると、之が爲に第一に農業及牧畜が打撃を受ける。と云ふのは無兒家庭の消費は主として幼少年階級の需要とは異なるものにその方向が向けらるゝ爲に、その脱落を補償することが出来ぬからである。その結果は耕地の縮少、家畜數の減少となり、國民經濟的に全く喜ばしからざる事態を生起せしめる。

出生減退の惡影響は農業に及ぼす惡影響に止まらず、更に玩具工業、學用品工業、教育設備等の如き幼少年を對象とするものが打撃を蒙る。此場合にも無兒家庭の消費は、多子家庭と同様の所得ある場合に於ても、その脱落をカバーすることはない。衣料や住宅に就ても亦同様のことが云へる。

かやうにして出生減退の結果としての補償されない國民經濟的損傷は之を別とするも、無兒家庭の需要は主として農業や玩具工業等に比し勞働依存度の著しく低い産業によつて生産さるゝ財貨に向けられてゐる。麥酒釀造、火酒製造、映畫、その他大衆的奢侈品製造工業等は廣義に於ける食料生産や各種の教育的手段の準備に比して確かに勞働力を要することが少い。殊に後者二つは景氣による動搖が少い點に於て國民經濟的に有用なるものである。而してそれは、資本主義經濟に於ける景氣循環過程に於ける不況期の接近につれて、大衆的奢侈品は直に制限され、その産業には失業が發

生することになるが、日常の必需品に對する需要は比較にならぬ程安定的であり、景氣にはかゝはりがない點に現はれてゐる。

以上によつて出生減退が勞働市場從て國民經濟に及ぼす一般的効果が如何なるものか明かであらう。此惡影響が一定の時、一定の國に於て如何なる程度に現はるゝかは、特殊的研究を必要とする所である。而して此點に關聯して其一例として佛蘭西が農業に於て如何に打撃を受けたかに就て略説することにする。

佛蘭西は西歐諸國中豐沃なる農業國の一であるが、今日最早や食料の自足自給を爲すことは出来ない。一八五〇—七〇年時代には佛蘭西は相當量の穀物を輸出してゐたが、第一次大戰前既に毎年約二、三〇〇、〇〇〇チエントナ一の穀物を輸入しなければならなかつた。其後益々多量の輸入を必要とし、一九一九—二三年には平均平均二五、六〇〇、〇〇〇チエントナ一を輸入した。カヂオの考へによると近い將來に於て三千萬チエントナ一以上の輸入を必要とするであらうと云つてゐる。而して此食糧不足の状態は今日に於ても改善されてはゐない。如斯穀類の輸入が飛躍的増大を示す理由は實に數十年に渉る耕地面積の減少に基くものである。ハルムゼンの云ふ所では、一八九〇年に七百萬ヘクタールに上つた穀物栽培面積が一九一三年には六百五十萬ヘクタールに減じ、一九二三年には農業の盛なアルザス・ローレンの還付を受けたにも拘はらず穀物栽培面積は五、二〇〇、〇〇〇ヘクタールに過ぎず、之に對し、休耕地は一九一三年の三、七九三、四五〇ヘクタールより四、七四九、四二〇ヘクタールに増加した。併し此栽培面積さへも人によつては多すぎるとし、一九二三年に於て實際は四百五十萬ヘクタールを越えなかつたらうとしてゐるものもゐる。勿論吾人はかゝる變化に、農業經營に於ける轉換、即ち穀物栽培より牧畜への轉換が關聯あることを忘れてはならない。即ち交通特に鐵道の發達によつて、季候的に不利なる高原地に於ける穀物栽培に代つて、外國より安價な穀物が輸入さるゝ様になつたこと、その他機械器具人肥等が甚だ高價となつたこともその原因であるが、必要な勞働力が得られなかつたことも、その重大原因である。マンヘ縣に於ける例を見るに、且て三六〇、〇〇〇ヘクタールの穀物栽培面積を有してゐたものが四〇年後には一六一、〇〇〇ヘクタールに減じたのに對し、牧野地は同一期内に五六、〇〇〇より三〇〇、〇〇〇ヘクタールに増した。又同時に勞働力も亦五〇%を減じてゐる。

如斯にして出生減退による土地荒廢の經濟的結果として地價の低落を來たすことは必然である。ル・ケルシー(ル・ロ  
ー縣)に於ては相續財産特に農場の値下りは甚だしく、一八六九年に五二、〇〇〇法の價值を有したものが、一九〇七年  
には一七、〇〇〇法で賣れて居り、又一八七三年五六、〇〇〇法の價值を有したものが、一九一三年には一八、〇〇〇  
法となつた。又ペリゴールでは一八七六年二三三ヘクタールの土地が三二七、五〇〇法したが、一九〇八年にはそれが  
一一三、五〇〇法で賣れた。かやうな例はいくつも擧げることが出来る。殊にガロン谿谷地方に於ては土地ばかりでな  
く建物も亦著しい値下りを見せてゐる。

ハルムゼンは云ふ。「出生減退及びその結果特に地價の下落によつて、佛蘭西は一八七九—一九一四年の期間に三百  
五十億金法を失つた。人間及金錢の損失は一八七〇—七一年の戦争より遙かに大なるものがあつた。」勿論農村に於け  
る人口減退のみがかゝる現象の唯一の責任者ではないが、それが又重大なる一役を買つてゐることは否定出来ない。と  
云ふのは佛蘭西に於ても總ての地方に於て同一現象がある譯ではなく、地方によつては却て地價の高騰を來たしてゐる  
所も少くないが、此等は何れも人口の増加を見てゐる地方であり、又地價の低落を見た地方は何れも人口減退の地方で  
あつたからである。

### 財政に及ぼす影響

出生減退によつて急激に人口が減少する國は又財政的に種々なる困難に直面せざるを得なくなる。人口の減退は消費  
者や生産者即ち納税者の減少を意味することとなる。然るに國家の一般行政費は殆ど減じない。即ち行政機構の規模も  
經濟的諸設備の維持運営、例へば道路、港灣、鐵道等は人口が減じた程度に直に減るものではない。かくて收支の均衡  
が破れ、遂に財政の破綻を來たすこととなる。

人口が減退する國に於ては、過去に於ける財政負擔即ち公債負擔は益々減少する人々の双肩に重壓となつて來るばか  
りでなく、かゝる將來に希望を持ち得ない國では、將來その公債發行に超克し得ざる如き困難に遭遇せざるを得なくな  
る。かゝる事情の下に於て財政の均衡を計ることは益々困難となる。更に老年者數が増大するにつれて、年金、その他

老年者保護の爲の費用や補助金の増大を免かれぬことになる。同時に社會保險の運営に困難を來たすことも多くの人々の指摘する所である。而してそれが又國家財政への負擔の増大を來たすことになる。

### 精神的影響

出生減退の精神的影響を無視することは出来ない。出生減退は個人的に女性や兩親に種々なる影響を與へる。例へば女性には母性たることによつてその本來の特徴があり、結婚、妊娠、出産を通して女性としての人格的完成がある譯であるが、從て妊娠も出産も經驗しない女性には女性生活に於ける多くのことに就て理解や共鳴を欠き、正しい批判を下すことが出来ないであらう。又子供のない夫婦の老後生活に於ける寂寞とか孤獨感と云ふ様なことも個人的には甚だ重大なる問題であるが、又同時に社會的な面に於てその影響が現はれる。先づ國家の運命とのつながりに於て、多子家庭が無兒家庭に比しより大且緊密であることは、自國の將來にその子女が主導的役割を果すこととなる點に於て、一層の關心を持つからである。即ち子女の幸福を希求せざる親はゐないのだから、從て彼等は國家の將來に對して自然より大なる關心を持ち、國家の利益の進展に對して、物質的な犠牲をも嫌はない。之に反し無兒家庭に在つては生きてゐる限り安樂であればそれで充分で、あとはどうなろうとかまわないと云ふ様な全く利己的な觀念の支配を受ける。此意味に於て多子家庭は國家を構成する最も健全なる細胞として、國家の發展と存続とを保證するものと云へる。

出生制限の結果一兒又は二兒制度が行はるゝこととなるが、子供の数が少いことは兩親に取りてその育成の費用を節約することになり、從て多子の場合には出来ない充分なる教育を與へ立派な人間に育て上げ、その兩親と同等或はそれ以上の社會的地位に就かしむる機會を大ならしむることとなる。之は實際出生制限の一大きな理由の一に擧げられてゐる。併しながら此際手離に獨り兒、又は二兒と云ふ少數兒の教育が教育學的見地より果してうまくゆくかどうかは別問題である。教育學上「獨り子」の教育は種々の問題を提供してゐる。常識的に考へても獨り子が多子に比して父母より可愛がられ、甘やかされて育てられる爲に我儘で利己的で、非社會的であるのに對して、兄弟の多いものは獨立的協調的且自由である。之は多子家族の子供は云はゞ一つの社會の中に生長するものであるから、互に切磋し、助け合ひ、又

自分のことは自分とする氣風を持つが、如斯は獨り子に欠くる所であるからである。ハルムゼンは此點に關聯して、佛蘭西人が以前甚だ親切、丁寧、慈善、寛好等の美德を具へてゐたことは古い著作、傳記、旅行者の記錄等に見えてゐる所であるが、此半世紀にその轉換の甚だしきことは驚くばかりで、旅行者は今日かゝる美德に出會ふことの代りに狹量と吝嗇と貪欲とがあると酷評してゐるが、兎も角も獨り子が支配的となる社會に於てかゝる傾向は否定し得ないであらう。

出生減退は上流の知識階級に甚だしいことは統計の示す所であるが、此點に於て劣性淘汰を云々するものがある。即ち文化の維持者たる知識階級が減つて精神的に劣つた大衆の支配する社會となると云ふのである。所謂知識階級に於て出生率が低く、惡質遺傳者に於て高いことは統計の教へる所であり、又後者が甚だ増加しつつあることも事實である。併し文化の維持者を以て上流知識階級のみに限ることが果して正しいかどうか、又惡質遺傳者の増加が果して社會の文化的墮落を結果する程大なるものとなるか疑問であらう。

最後に出生減退は老年者階級を増大せしめ、人口の老年化を來たすが、その結果必然に社會をして保守退嬰的ならしめ科學の進歩、政治社會變動に適應するを得ず、爲に文化の停頓を來たすことは、容易に結論し得る所である。此點に就てはトムスンも可成詳論してゐる。

### 國防に及ぼす影響

出生減退從て人口減退が佛蘭西で問題となつたのは、先づ國防的見地よりであつた。之は人口制限を有利なりとする自由主義者に於ても認めざるを得なかつた點で、如何なる平和的な國であつても、隣國の戰鬭力や國境防備の狀態に無關心な國はあるまい。佛蘭西の出生減退從て、獨逸に對するその人口増加に於ける懸隔が堪へず佛蘭西をして、その安全に對する不安而してそれより生ずる人口の劣位性に對する國力萎縮の念が、その外交に於て焦慮の念に驅らしめたることは否むを得ない(註二)。

(註二) かゝる考へ方は以前より存した所である。シェーネは云ふ。「……一八六六年普墮戰後は數の必要性を明かにし、當時マルサス主義が主流を爲してゐた時代思潮に反撃を與へた。此動きは一八七〇年の慘事及びその後の人口調査が慘忍なる現實によ

つて從來全く慣れてゐなかつた思想を支持するに至つた時に、或力を得ることになつた。どうして以前あれ程批難されてゐた人口増加の獎勵に人々が復歸せんとし、又政府が昔時の如く干渉を試みんとするに至つたか。經濟學者は最初の總ての政治的事項と同様に時と共に推移し、又只或國にのみしか適用されぬ様な、その時の政治的必要に基礎づけられた學說に對しては好意を示さなかつた。然るに此國は佛蘭西であり、從て如何なる犠牲を拂つてもその優越性は之を擁護しなければならぬので、人口調査が明かにせる事態の持續の前には經濟學もその證んだ高所を去つて、此特殊事情を検討し、その原因を探究し、可能なればその救済手段を見出さんとした。」(Lucien Schöne, Histoire de la Population Française, P. 286.)

云ふ迄もなく一國の國防力は主として、兵力、資材、戦力の三要素の如何に依る。兵力の大小は出生の如何によるが、此點出生減退によつて脅威を受けてゐる。舊い資料であるが、佛蘭西軍隊の出身家族別構成を見ると、一九一一年に於て、

子供四人を有する家族よりの出身者	一五%
五人	一五%
六人	九%
七人	八%
八人	七%

となつてゐる。即ち入隊兵の半數が多子家族よりの出身者である。併しながらその後此多子家族の數が減少せることは統計の示す所である(拙稿、「佛蘭西人口構成並にその變化に就て」商業と經濟第十九卷第二册參照)。此點質量共に軍隊の低下に思まざるを得ない。かくて黒人部隊、外人部隊にその兵力不足の補填を仰がざるを得なくなつた。併し之が如何に危險なるかは、ローマ帝國が國防の爲に蠻族の徵募を開始した時、その崩壞が準備された史實によつても明かである。

次に戦争資材に就てであるが、近代戦争の特色として益々經費を食ふことになり、財政的負擔の増大を來たすが、人口減退は之に堪へることが次第に困難を加へることとなる。次に戦力は結局その生産力の綜合、特に金屬、機械、化學工業の能力の如何に依るものであるが、等しい文明の下に於ては、生産力は人口の大なる國に於てより大である。何となれば、人口の大なる所に於ては市場も大であるから、從て工場も多くなり、生産も増大するが、之に反し人口減少の

國に於ては、その逆の現象が起るからである。

ポブラが「兵力や資材や戦力が無限に減ずるのを拱手傍觀せざるを得ない國が、どうして人口増加の一途をたどる國をして、自國の權利を尊重せしめたり、或はその植民地を防衛したりすることが出来るだらうか。如何にして持續的平和を希求することが出来るだらうか。此問題に對して何等の迷蒙は許されない。充分なる出生が國防の基本的要素のである。之は既に希臘、羅馬の經驗済のことである。」と述べたのは、第二次大戰の起る直前のことであつたが、彼の危惧してゐたことは、その儘現實の悲劇となつて佛蘭西を襲つたことは人の知る如くである。平和は萬人の欲する所であり、恒久平和の理想に向つて人類はあらゆる努力を献げねばならない。だが現實の國際關係の前途は荊棘の道であり、恒久平和の理想は、人類の懸命なる努力にも拘はらず、早急には實現さるべくもない。兎も角も佛蘭西が外交問題に於ける深刻なる患みの背後に宿命的な出生減退があつたことは、ポブラと共に何人も之を認めざるを得ないであらう。

以上出生減退、延ひて人口減少の經濟的・財政的・心理的・國防的影響に就て述べたのであるが、事實に於ては此等の影響は相互にからみあつて、一層その惡影響を深刻且重大ならしめてゐることを忘れてはならない。前には述べなかつたが、外國人の問題にしても、佛蘭西に於ける人口の不足が第一次大戰後荒廢地の復興の爲に、外國人の奔流的流入を來たすことゝなつたが、之は單なる經濟問題ではなく、又それと共に心理的にも、又國防的にも種々なる困難を生起せしめてゐる。更に佛蘭西人が最もその誇りとしてゐる佛蘭西語の優越性普及性も出生減退によつて一大打撃を受けつゝあることは、佛蘭西の文化的屈辱として彼等の堪へ難いことであることも多くの學者の指摘する所である。かやうにして出生減退の及ぼす影響は、吾々が考へてゐる以上に、廣汎且深刻なるものがある。かく考へる時、「出生の低落を停止せしめることが佛蘭西に取つて生死の問題であることを疑ふものはないであらう。」

佛蘭西が直面してゐる此生死の問題に對して、佛蘭西が只拱手傍觀すると云ふことはない。前にも述べた様に、現状が悲觀的であると云ふ正しい認識があることが、その現状に對する諦觀を意味するものではなく、否却て佛蘭西に決意と希望とを與へ、此事態を如何に改善すべきか、より力強き對策を要請することになる。

## 四

前節に於て佛蘭西に於ける出生減退に基く人口減退が佛蘭西に取りて如何なる害惡を齎らしてゐるかに就て述べた。從て此人口の動きに對して何を爲すべきか。人口を維持し、減退を阻止するには如何にすべきか。云ふ迄もなく、人口の量的維持を計る爲には、佛蘭西の人口減退の根本原因が出生減退に在る以上、當然に如何にしてその減退を阻止し、その増加を計るかに重點が置かるべきであるが、人口の増減が主として出生死亡の差である限り、死亡の問題に對して無關心であるべき謂れはない。人口確保對策の二大支柱として死亡の減少と出生の維持増加の二つがある譯である。

此點より先づ死亡減少が問題となる譯であるが、死亡減少の問題は人口の維持増加と云ふ觀點からばかりでなく、過剰人口に患んでゐる我國の如き所に在つても、死亡の増加と云ふが如きことは政策としては考へられざる所である。肺結核、梅毒、癩等に對する鬭爭、不良住宅の改善、社會衛生、保健施設の完備等の必要に就ては云ふ迄もないことである。此意味に於て死亡減少策は人類の幸福を増進するものとして大なる文化的意義を有するものである。

別稿でも觸れた様に佛蘭西は西歐諸國に在つてその死亡率は決して低い方ではない。それは輝かしい佛蘭西文化を考へる時、佛蘭西の不名譽とする所であり、死亡率の減少を計ることは佛蘭西として文化國の面目上よりも當然に努力すべきことであるが、況やその人口狀態に照らしてその急務なることは喋々を要しない。佛蘭西の高死亡の原因としてアルコール飲料の過飲を擧げるものがあるが、統計的には之を以て直ちに佛蘭西の高死亡率の原因とすることは適當ではない。併しながらアルコール飲料の過飲が恐るべき疾病や不道德の素地を構成するものとして間接的原因たることは之を否定し得ない。かゝる慣習を一朝一夕に改め得ないことは云ふ迄もないが、社會保健教育によつてアルコール飲料の過飲の害を闡明せしめ、國民の自制に待つの外はないであらう。

墮胎の問題は人口政策を考へるに當つて看過すべからざる大問題である。と云ふのは之は文明國に於ける出生減退に重大なる影響を與へてゐるからである。人は墮胎と云へば刑法上の犯罪としてのそれを考へ、統計上現はるゝその數が甚だ少いのを見て或は之を過少評價するかもしれぬが、それは大なる誤りで、廣い意味に於て人工流産が廣汎に行はれ



てゐることは、多くの産婦人科醫の證言する所である。一九三〇年の推計によると獨逸に於ける人工流産の數は六〇〇、〇〇〇—一八〇〇、〇〇〇との事で、之は第一次大戰前の約三倍で、記録された出生數の約三分の二に等しいことになる。米國でもその數を二百萬と見積る人もあるが、コスマツクによるも、都會地に於て出生に對する流産の割合は二、五對一に對し、田舎では五對一で、之は米國全体で流産が五十萬以上に上る計算になるとしてゐる。それにしても決して少い數ではない。ルパージュは巴里に於て流産（墮胎を含めて）は出生の數と等しいとし、そのうち八〇％は人工流産であると云つてゐる。記録によれば巴里に於ける一ヶ年の流産數は二〇、〇〇〇胎であるが、人によつては闇から闇の流産がその二、三倍はあると考へてゐる。此等はそのことの性質上正確なる統計が得られず、又その推計が可成り誇大に爲されることも忘れてはならぬが、流産が今日人口制限に一役を果しつゝある事實は看過するを得ない。

流産（墮胎）が直接出生の減少に關係するばかりでなく、更に考へねばならぬことは、流産による母性死亡率である。その率は米國に於ては地方によつて異なるが二—四％と見積られ、之の爲に死亡する數は八、〇〇〇人と計算されてゐる。之は勿論一切の流産を含んでゐるが、所謂墮胎がその大部分を占めてゐることは容易に結論し得る所である。佛蘭西もその例に洩れるものではない。墮胎は妊娠中絶の簡単な方法として、特に下層階級に多く行はれてゐるが、その爲の死亡率は歐米諸國の研究によれば著しく高く妊娠中の死亡の二〇—二五％に上るとのことである。更に又之が爲に後天性不妊症を來たすことも看過すべきでない。その數を推計することは困難であるが、學者の研究によつて惡影響あることは明かである。かくて墮胎の問題は人口維持の觀點に立つ時、墮胎をなくすることは、相當數の出生數を増加することになるばかりでなく、又それより生ずる母性の死亡を節約し、又それより生ずる不妊症をなくし、之によつて將來人口増加の源泉がその限りに於て確保さるゝこととなり、それが人口維持の上に貢獻することだけ少し少なからざるものがある。従て佛蘭西の如き國に於ては、かゝる社會災禍に對しては、國家は強權を以てその彈壓に努むべきは言を俟たぬ。

死亡率の改善は文化國として當然爲すべきことであるが、佛蘭西の如き比較的高死亡率の國に於てその爲により一層の努力を傾注すべき要があることは云ふ迄もない。所で茲に考へねばならぬことは、死亡率の改善によつて個人の生命を延長することは可能であつても、それには限界のあることで、如何に衛生設備が完備し、醫學が進歩し、今日人類の

最大の敵である結核や癆等に對する治療方法が完成したからと云つて、人類の生命を永遠ならしむることは不可能である。人間は結局壽命が延びたところで、何年かの後には老衰其他の原因によつて死ぬる。諸種の病氣の克服によつて何萬人何千人かの生命が救はれたとしても、何年か経てばそれは他の原因による死亡の増加によつて相殺さるゝことになる。個人の生命の延長は個人に取つても、社會に取つても誠に喜ぶべきことで、そこに文化の發展の偉大なる恩恵がある譯であるが、人口學的に云へば或病氣によつて死すべきものが助かつて、子供を持つて再生産に關與すると云ふこととでなければ、それは人口減退期が何年か延期されただけで、窮局的には人口の維持の眞のプラスとはならない。何となれば死亡率の低下は出生數を同一とすれば、それだけ人口の自然増加となるが、減つた死亡數は幾年かの後の死亡増の原因となるからである。従て人口の維持と云ふ點よりは死亡の減少は一時的の手段であつて、出生の確保と云ふことが根本的條件となる。勿論それは死亡率の低下に對する努力を輕減し或は輕視せんとするものでないことは斷る筈もない。(以下次號)